

子どもと共なる日々

こどもたびごっこについて



梶田正子

久しぶりに、一年前まで住んでいた団地の遊び仲間が、我家に集まった。四歳、六歳、一年生、二年生、三年生の男女、六、七名である。

「何してあそぶ？」

「何しようか」

「……こどもたび!!」

「うん、いいよ」

子ども達の相談は、早速にまとまった。きいていた私は、予想通りの結果に、思わずおかしくなってしまった。それほどに、この仲間は、「こどもたび」「ごっこが好きなのである。

耳なれない名前のこのあそび、子ども達の説明によれば、

「子どもだけで、旅をして行くあそびなの。だから「こどもたび」「っていうの」だそうである。二年以上も前に、この仲間たちの中で生まれ、それ以来、爆発的にそればかりであそぶということはないが、かなり頻繁にくりひろげられ、楽しまれてきたあそびである。一体、このあそびの何が子ども達をそんなにひきつけるのだろう。早速にあそびの雰囲気に入っていく、生き生きとした子ども達の姿をながめながら、私はふと、そんなことに思いをめぐらしてみた。

このあそびは、まず「たび」に必要な乗物づくりから始められる。部屋の中の移動可能な椅子、テーブル、ワゴン、重くて動かないソファからはクッション、その他、子ども達が操作できそうな家具のありったけを集めて来て、それをならべながら作って行くのだが、面白いことに、椅子やテーブルはすべて、さかさまにしたり、横倒しにしたり、二つ以上を組み合わせたなどして、ふつうの形では使わないことである。そうすることによって、子ども達もぐり込んだり、すっぽりとハマったり、ねそべったりできる思いがけない空間が生まれるからであろう。

それにしてもここ数年、新しい家具など何ひとつふえない我家であるが、その毎度同じ素材から、子ども達が作り出す組み合わせやならべ方の、いつも何と新鮮で豊かなことだろう。このようなダイナミックな創造活動が、このあそびの大きな楽しみのひとつになっていることは、子ども達の生き生きとした動きや表情からしても、まちがいないようだ。見ている私まで楽しくなってしまうのだから。

このようにして作られる乗物であるが、二年余の間には、子ども達の興味の所在や生活経験などによって、実にいろいろな種類のものが登場した。たしか一番最初は、ギッチラコ

ギッチラコとくぐボートのイメージであったと思うのだが、友達が飛行機で九州まで旅行したなどという話を誰かが学校で聞いてきた時には、しばらく飛行機が作られ、またある時、横浜に入港した豪華客船を見せに連れて行った時には、クイーン・エリザベス号がひとしきり続いた。これらの組み合わせ型もあらわれた。男の子達が戦争ごっこに熱中していた時期には、潜水艦にもなったし、子ども達の興味がスーパーカー一辺倒になった時には、椅子やテーブルのスーパーカーまで作られた。しかしさすがにスーパーカーに対しては、「スーパーカーじゃあ、いっぱい乗れないから、旅なんてできないよ」

という年長の子どもの意見が出て、結局、

「旅行だから、キャンピングカーにしよう」

と変更になったけれど……。

さて、家具をならべての乗物がだんだん構成されて行くにつれ、いよいよ「ごどもたび」のイメージがそれぞれの子どもの中にふくらみ、展開されてくる。幸いなことに(？)、この仲間の一人として、実際に飛行機や豪華客船やキャンピングカーなどを使っての旅行はしたことがないので、彼らのイメージは現実には制限を受けることなく、人から聞いたり、テ

レビで見たり、本で読んだりの種々の知識が次々と組み合わさって、実に豊かにひろがって行くところが楽しい。

さかさまにひっくり返したテーブルの中に入り込み、よきよきとつ立っているそのテーブルの足を操縦桿のつもりで握りしめながら、

「おっ 島が見えたぞお。着陸用意はいいかあ」などと叫んでいるTちゃんがいるかと思うと、横の方の椅子の所では、女の子のYちゃん、Tちゃん、Eちゃん達が、ままごと道具を並べながら、

「今日のごはん 何にしましょうか」

「違うわよ、飛行機は、スチュワーデスがみんなの食べたいもの きいて配るのよ」

「それじゃ あたし スチュワーデスノ 子どものスチュワーデス」

「あたしもノ だって、スチュワーデスって一人じゃなくても、いいんだもん」などと言っている。

R君は、Tちゃんの着陸用意の声をきいて、

「もし、島に海賊みたいのがいたら、これで、うっち

やうんだ」と言いながら、ブロックで何やら一心に作っている。一方では、M君が、一度ならべた椅子を再びあちやこちへ動かして直していたが、

「ちょっと どいてえ。もつと広くなるんだから。あつそうだノ これ ふねにしようか」

「ええつ、ふね？ だって今、空飛んでるんだよお」とTちゃん。

「そうか……」と言ったものの、あきらめきれないM君は、「じゃあ いいこと考えた。海にも入れるの、あつそうだノ Tちゃんのは、船から飛び立つ飛行機、ね、いいでしょ？」

「……うん……でも、たいていの時、飛んでるんだよ」「いいよ、じゃあ、ここからこっちが飛行機で、こっち船ね」

すると、さっきのYちゃん、Eちゃん達、

「あら あたしたちの乗ってるよ 船ですってよ」

「なんだあ。あたしスチュワーデスがよかつたのに……」

……Tちゃんの方に乗りかえたいな」

「いいよ、じゃあ待ってて。もうじき着陸してあげるから」

「あたしは船の方がいい。だって船だったら、広いからパーティもできるもん。そうだ！ 今日、うそっこにEちゃんの三歳の誕生日にしない？」

なにしろ七、八人もの年齢も性別もちがう子ども達であるから、必ずしも個々の興味やイメージが一致するとは限らない。いや一致しない場合の方が多い。それを子ども達は、うまく具合にお互いの接点を見つけ、自らのイメージを限りなくふくらませながらも、ひとつのまとまったあそびの意識の中で、その楽しさを更に増幅させている。そしてこのひとつの大きなあそびの中にあるという意識は、同時に、この仲の良いあそび仲間の一員であるという安定感とも、だぶっているように見受けられる。「こどもたび」には、そんな大きな

大きな容れものの要素があるようである。だからこそ、二年余りもの長い間、この子ども達の中で、常に魅力あるあそびとして楽しまれ続けてきたのだろう。

子どもの中で生まれ育まれ、好まれてきた「こどもたび」であるが、さて、この先いつたいこのあそびはどうなるのだろうか。この仲の良い遊び友達も、やがてはバラバラになっていくのかもしれないが、「こどもたび」も、それと一緒に消えてしまうのだろうか。それともメンバーは離れてしまっても、彼等の中に、何らかの形で、そのわずかな部分でも、とどめられるものだろうか。子ども達の傍でそのあそびをながめ、共に楽しさを味わってきた私には、愛着と共に、何とはなしの感傷をも感じさせる「こどもたび」ごっこである。

みどり会夏季合宿研修会

期日変更のお知らせ

五月号でお知らせしました開催期日
が一日繰り上がりまして、22日(火)
23日(水) 24日(木)となります。

——みどり会研究部